ベルクソンと否定の問題（4）

――否定と差異[1]

高坂　絢乃

キーワード：ベルクソン、否定、暗示、メルロ＝ポンティ、ドゥルーズ

はじめに

本稿は、ベルクソンの否定に関する考え方を整理するうちに浮上してきた新たな問題、すなわちベルクソン哲学における他者の問題と、暗示する言語の問題がどのようにつながるのかを明らかにする。

まずは、一節を割いて、前三稿[2]の成果を整理しながら、そこから自ずと「他者」の問題が浮かび上がってくることを確認する。そして、第２節では、「否定」ではなく「差異」を重要視するドゥルーズのベルクソン解釈について考察を進める。第３節では、ドゥルーズの言う「内的差異」では捉えきれないものを探るため、メルロ＝ポンティの「隔たり」の哲学を手がかりに考察を進める。第４節では、「内的差異」とは異なる「外的差異」を考えることから、他者性を導くことが主題となる。

１．ベルクソン哲学に見られる他者性

われわれは、前三稿において（以下、発表順に「(1)」「(2)」「(3)」と略称）ベルクソン哲学において、「否定」がどのように扱われているのかを確認してきた。

まず、「(1)」ではベルクソンが『創造的進化』において否定すべきものとして捉えている種類の否定概念について確認した。「(1)」で扱った否定される否

定には二つあり、一つ目が肯定と同列に扱われてしまう否定であり、二つ目が弁証法的な否定である。

一つ目の否定は、実は肯定についての肯定（主張についての主張）であり、その意味で一次的・直接的というよりは、二次的で媒介的・間接的であることが明らかになった。肯定は、直接に事物に向けられているのに対して、否定はある判断に向けられた判断であり、実在を直に掴んでいないという点で、ベルクソンはこの否定を批判する。しかしまた、その間接性ゆえに或る特殊な性格を帯びることも明らかになる。否定は、他者に対する警告であり、そこには対話があり、ベルクソンは「社会のはじまり」（EC 288）を見ている。他者を前提としているために、否定は教育的あるいは社会的な性格を帯びるようになる。

二つ目は、弁証法的な否定作用である。こちらは、直接的ではなく、システムのなかで展開され、システム内で概念を操作していくにつれて概念が実在を離れてしまう点で批判されている。

二点に共通のこととして、否定は事象を直接捉えそこねているという点では批判されるが、反対に、否定の社会的・教育的な性格を考慮すると、人と人とが関わりあう実践的な場面においては、ポジティヴな中身を持ちうるとも言えるだろう。『創造的進化』におけるベルクソンの否定についての考え方を明確化していくうちに、他者性あるいは社会性という特徴が浮かび上がってきた。

「(2)」においては、ベルクソンが肯定的な態度を取る否定の力について考察した。それは、否定の直観的な能力と、障害を取り除く否定である。否定の直観的能力を考察する際に避けることのできないイマージュについて考察を進めると、「暗示［suggestion, suggérer］」という言語の用い方との関係が浮かび上がってくる。暗示する言語は、直観によって捉えたものを他者に精確に伝えるために必要なものなのである。また、ベルクソンが肯定的な態度を取る否定は、直観的な能力にしても、障害を取り除く力にしても、どちらにも共通しているのが「単純性」である。これら否定に関連する単純性は、知性の働きによる分析からは引き出されることのないものであり、思考の働きよりも行為・行動といった実践的なものと関係がある。ここにも否定の持つ社会性が見られることが明らかになった。

「(3)」では、否定というものが実際のわれわれ人間の社会ではどのようなも

のとして働いているのかを考察し、反自然と抗議という二つの側面から考察を進めた。われわれ人間の社会ももともとは自然の要請にしたがって、『道徳と宗教の二源泉』で言うところの「閉じた社会」であったが、しだいにわれわれはその自然的な要請の方向に反して、「開いた社会」に向かおうとするのである。最も自然からかけ離れたものとして、民主主義が挙げられ、そして民主主義は「抗議」という形で世に現れたことをベルクソンは示している。

また、ベルクソンの哲学自身も抗議という形で現れており、抗議という形を取るからには、やはり抗議すべき対象、抗議すべき相手というものを想定しており、否定的なものが持つ、社会性や他者性との関わりが見出される。

以上、前三稿を振り返ってみたわけだが、そこで確認されたのは、まず、『創造的進化』における否定が他者をめざす教育的・社会的な性格を持つものだということであり、それはベルクソンによって明示されている。その他のところで語られている否定的なもの、弁証法や直観に近いイマージュが持つ否定の直観的能力や障害を取り除く単なる否定については、たしかに、これらが他者性を含んでいるということは明記はされていないものの、ベルクソンがめざした哲学の言語の役割を考え併せてみれば、これらの否定的なものたちが他者性を暗示していることは理解に難くないだろう。ただし、ベルクソン哲学が持つ他者性は、必ずしも主体と客体という一対一の他者性ではなく、非人称的なつまり社会性とも呼びうるような他者性である場合も少なくない。

以上のようなわれわれの考察は、まず「否定」がどのような点において批判されているのかを確認し、批判される点を明らかにしつつ、同時に否定作用による他者との関わり、他者性が現れてくるのを見るという展開であった。否定の考察から始まったわれわれの考察は、他者の現れに立ち会うことになった。そして否定の直観的能力とイマージュとの関係から、暗示する言語というベルクソン哲学における言語用法もまた浮上してきていた[(3)]。この暗示する言語においても、他者の存在は重要なものであり、ヴァレリーが指摘するように、「自分が自分の意識のなかでなした諸々の発見を、他人の意識のなかで再構成したい」[(4)] という欲望が見られるのである。

前三稿まで否定を考察するにあたり浮かび上がってきた他者性の問題を踏まえ、本稿では主にドゥルーズのベルクソン解釈との比較によって、さらにベル

クソン哲学における否定と他者性の重要性を明確化したい。

2．ドゥルーズの「差異」との比較

ジル・ドゥルーズの『ベルクソンの哲学』（*Le bergsonisme*）は、ベルクソン哲学における持続、記憶、エラン・ヴィタルという三つの概念を分析したものである。この著作は、ベルクソン研究の分野において高く評価され、のちの諸研究にも多大な影響を及ぼしている。そして、持続と記憶とエラン・ヴィタルに関する詳しい分析がなされていると同時に、「否定的なもの」に対するベルクソンの否定的態度を強く主張している代表的な著作でもある。本節においては、ベルクソンの「否定」と、ベルクソン研究者としても名高い哲学者ドゥルーズの「内的差異」の概念を分析することにより、実はベルクソン哲学において他者性を基底とするいわば外的な差異が重要な役割を担っていることを明らかにすることが目的である。

まずは、ドゥルーズがベルクソン哲学の解釈において内的差異を重視し、他者性や否定よりもずっと重要視していたことを次の引用で確認しよう。

> 内的差異は、矛盾、他者性、否定から自己を区別しなくてはならないだろう。そこから、差異に関するベルクソン的な方法や理論は、プラトンの他者性の弁証法であれ、ヘーゲルの矛盾の弁証法であれ、弁証法と呼ばれる差異についての他の方法、理論と対立することになる。これらの弁証法は、いずれも否定の現存や権能を含んでいる。内的差異は矛盾、他者性、否定にまでは行かないし、行くべきではない。なぜなら、事実上これらの三つの観念は、内的差異ほど深いものではない、あるいはその差異を外側から捉えた眺めにすぎないからである。ベルクソン的な考え方の独創性は、まさのこの点を証明していることにある。内的差異をあるがままに、純粋な内的差異として思考すること、差異の純粋概念に達すること、差異を絶対へと高めていくこと、これがベルクソン的な努力の方向である[(5)]。（強調はドゥルーズによる。）

「(1)」において明らかになったこと、つまり、ベルクソンが弁証法を斥けるべきものとして考えていることを、上記でドゥルーズも主張している。ドゥルーズがベルクソン哲学を読み解くキーワードとして挙げる内的差異は、矛盾、他

者性、否定から分けて考えられなければならない。たしかに内的差異は、矛盾とも他者性とも否定とも異なるものであろう。しかし、ドゥルーズは「否定」と一括りにしてしまっているが、われわれが「(1)」で明らかにしたように、ベルクソンが否定的な態度を取る否定と、肯定的な態度を取りその力の有用性を認めていると思われる否定が存在する。一口に否定と言っても、無の錯覚へと導く否定や弁証法的な否定、否定の直観的な能力や閉じられたものを開く力を持つ否定、などさまざまなものが彼のテキストのなかに見られるのである。

ドゥルーズはベルクソン哲学において「内的差異」を、矛盾、他者性、否定と区別し、これら三つよりも深みのあるものとし、重要視しているが、実は、「内的差異」ではなく「外的差異」が重要な役割を果たしているのではないだろうか。内的差異が、矛盾、他者性、否定と区別されるものであることは認められよう。しかし、内的差異が後者三つよりも深みがあるか否かは、定かではない。ドゥルーズは、持続との関係を念頭に置いて、内的差異が矛盾、他者性、否定よりも深いものであることを述べているが、果たしてそうなのだろうか。

ドゥルーズは、ベルクソン解釈において、否定的なものを排除した点を、ベルクソンの最大の努力として評価している。

> 否定なき差異の概念、否定的なるものを含まない概念に達すること、ベルクソンの最大の努力がそこにある[(6)]。

彼が差異という概念でもってベルクソン哲学を要約しようと試みていることがわかるだろう。「否定なき差異の概念」、「否定的なるものを含まない概念」に達することを、ベルクソン哲学のめざすところであるとドゥルーズは主張している。「差異に関するベルクソン的な方法や理論」が、あらゆる弁証法的な方法や理論と対立していることは、たしかに認められるだろう。「(1)」でも確認したことであるが、なぜなら、ベルクソンが述べているように、「弁証法と直観という二つの歩みは逆の方向に進む」（EC 239）からである。ここにおいても、ベルクソンが批判する弁証法的な否定と、『思想と動くもの』の直観的な否定が対立することが示されている。弁証法的な否定と、否定の直観的な能力は方向が逆なのである。

しかし、ドゥルーズの「否定なき差異の概念」とは何であろうか。ドゥルー

ズは、ベルクソンの否定概念を「否定なき差異の概念」として差異という概念のなかに包括してしまうかもしれないが、果たしてそれで、ベルクソンの哲学の試みを十分に汲み取ることができているのだろうか。たしかに、差異は差異としてベルクソン哲学における重要な概念ではあるのだが、差異とは別に、否定の概念が重要な位置を占めているのではないだろうか。ベルクソン哲学は、肯定的なものを前面に出しているからこそ、良いほうにも悪いほうにもさまざまな評価がなされているのかもしれない。しかし、ポジティヴな側面が目立つために、ひとびとの目から隠れてしまっているネガティヴな側面が存在するのではないだろうか。そのネガティヴな側面は、隠されてはいるけれども実際には働いていて、つまり、潜在的な力として働いていて、なにか重要な役割を果たしているのではないだろうか。ドゥルーズが重視する「否定なき差異の概念」、そして純粋に内的な差異では、取りこぼされてしまうようなものが、ベルクソンの否定のなかにはあるのではないだろうか。内的差異には包括されえないものが、否定が暗示する他者性である。ドゥルーズも主張しているように、たしかに内的差異と否定、内的差異と他者性は区別されるべきである。だがまさにそこで彼が見逃しているのが、ベルクソンが否定を通じて暗示している他者性の重要性である。

さらに、ドゥルーズが「内的差異」と区別する、矛盾、他者性、否定という三つのものを救い出すとすれば、矛盾も実はベルクソン哲学において有効に働いていることが指摘できよう。ベルクソンは哲学において何を批判していたのかを考えてみればよい。彼は、実在から離れて思考することを批判していたのである。たとえば、「(1)」では絶対的な無の観念という、実在から離れたものが批判されていることが明らかになり、また、対立・矛盾を構成要素とする弁証法が、実在を離れてただシステムのなかで空転するような形式的で空虚なものとして示されていた。彼が重視していたのは、実在［réalité］であり現実［réalité］なのである。

弁証法［dialectique］がそのような事態のために、つまり実在を捉えそこねて、システムのなかだけで虚しく展開していくという事態のために批判の対象となっていたわけだが、他者との対話［dialogue］を考えてみると事情は異なる。「(1)」で明らかになったことであるが、否定はたんにある人とある対象と

いう関係に収まるものではなく、その対象の前で、「ある人がある人に話しかけ［parlant］、反対しながらも［combattant］同時に手助けしている」（EC 288）のである。ここでの、対立・反対、ときには人と人との矛盾が生み出すものは、実在を離れ批判の対象となるような空疎な弁証法などではなく、社会に生きる現実の他者との関係である。この、否定することによって、ある人がある人に話しかけることによって、そこに生まれるものをベルクソンは「社会のはじまり」（EC 288）として示している。

このように考えると、ドゥルーズが批判した矛盾も他者性も否定も、ベルクソン哲学において、目立たない仕方ではあれ、少なくとも重要な役割を持っていることがわかるだろう。矛盾、他者性、否定をみな一括りにせずに、その中身を整理し、どのような面において批判され、どのような面は実際に有効に働いているのかを観察してみればよいのである。そうすれば、これら三つのものをすべて批判し、内的差異の名のもとに消し去ってしまう事態を避けることができるだろう。

ドゥルーズのベルクソン解釈を整理し、その問題点も指摘したうえで、われわれはどうすべきなのか。ベルクソン哲学において他者性の重要性を主張しようとすれば、内的差異に対抗するようなものを考えなければならないだろう。

3．メルロ＝ポンティのベルクソン解釈

前節において、ドゥルーズがベルクソン哲学において内的差異を重要視していることを見た。内的差異は、否定、他者性とは区別されるものである。本節においては、メルロ＝ポンティの「隔たり［écart］」を手がかりに、実はベルクソン哲学において他者性を基底とする外的差異が重要な役割を果たしていることを明らかにしたい。内的差異を重要視することによって、葬り去られてしまう否定や他者性が持つその独特なところを示すことができれば、内的差異と外的差異との差異が明らかになるだろう。

実は、メルロ＝ポンティは、ベルクソンの哲学の否定的な面に肯定的な価値を与えている。ドゥルーズをはじめとする有力なベルクソン解釈の文脈において、ベルクソンの哲学は、否定性を排除し、肯定性によって直接的なものへ到

達するという点において評価されることが多い。ベルクソン的な「直観」によってポジティヴな実在へと向かうことが評価されているのである。しかし、メルロ＝ポンティは興味深いことに、ベルクソンにおける否定的な要素に注目し、否定的な要素があるからこそ、ベルクソンの哲学が肯定的なものになることを主張するのである。以下の引用がそれである。

> 逆説的になるかもしれませんが、すっかり肯定的なベルクソンとは論争的なベルクソンなのであって、ベルクソンの哲学が確立されていく［s'affirmer］のが見られるのは、まさにベルクソンの哲学のなかに否定的なものが繰り返し現れてくるにつれてなのです[7]。

メルロ＝ポンティは、ベルクソン哲学に否定的なものが与える影響に注目していることがわかる。メルロ＝ポンティ自身も述べているように、逆説的ではあるのだが、否定の力によって、肯定性が増すのである[8]。

メルロ＝ポンティが、彼の哲学において「隔たり」を重視していることは、先に予告だけしておいたが、この「隔たり」を念頭に置きつつ、ベルクソンの「合致［coïncidence］」についてのメルロ＝ポンティの記述に即して見てみよう。

メルロ＝ポンティは、「哲学をたたえて」のなかで、「ベルクソンの言う有名な合致は、必ずしも、哲学者がその存在のなかにおのれを失うとか、存在のなかにおのれの根拠を置くということを意味するものではありません」と主張し[9]、実は「これまで合致と信じられていたものは、実は共存［coexistence］」であるというのである[10]。他の著作においてもメルロ＝ポンティは「合致」についての考察を展開し、『見えるものと見えないもの』のなかでは、「ことの真相は、ベルクソンがしばしば言っているように、合致の経験は『部分的合致［coïncidence partielle］』でしかありえない、ということである」[11] と主張する。完全なる合致ではなく「部分的合致」であり、いままで合致だと思われていたものは「共存」だということは、メルロ＝ポンティにとってどのような意味を持つのであろうか。それは、直接的なものを捉えるうえで彼にとって意味を持つのである。「直接的なものは、地平にあるのであり、そのような視覚において考えられるべきものであって、距離を隔ててこそ初めてそれはそれ自身であり続けるのである」[12] という彼の言葉が示すように、直接的なものの把握にとっ

て、重要なのは完全なる合致ではなく、「隔たり［écart］」だったのだ。

このようにして「隔たり」は、「共存」とも併せてメルロ＝ポンティ哲学の重要なキーワードとなっているものなのだが、メルロ＝ポンティによれば、ベルクソンの言う「合致」も実は「部分的合致」でしかなく、実質的に「共存」や「隔たり」を含意するものなのである。この「部分的合致」とは、ベルクソンの著作においては、『物質と記憶』や『道徳と宗教の二源泉』において用いられている言葉である[13]。加えて、「部分的合致」という言葉では表されてはいないが、それと同様の意味を持ちうるものとして、「持続についての我々の感得［ないし感情］、つまり我々の自我の自我自身との合致は、程度の幅を許すものなのである」（EC 201）とベルクソンが述べている箇所がある。また、絶対的な合致ではなく「部分的合致」をベルクソンが認めているという点では、「(1)」で見た「空虚」についても事情は同じである。われわれは、「(1)」で、絶対的な空虚の不成立についてのベルクソンの説明を見た。注意すべきことだが、絶対的な空虚の不成立は、空虚一般の不成立を意味しない。世界には、絶対的ではない空虚があり、存在のうちにある不在、世界のうちにある隔たりというものがある。「否定」は、その積極面では、言わばこうした相対的な空虚と肯定的な関わりを持つのである。「部分的合致」も世界のうちにある隔たりをもってして可能となるものである。

前節では、ドゥルーズの内的差異を考察したが、本節では、いま見たメルロ＝ポンティのベルクソン解釈をさらに延長しつつ、内的差異に対立するものとして「外的差異」を考察する。「外的差異」という言葉は哲学者たちによっては出されてはいないが、メルロ＝ポンティが自然との隔たりについて興味深いことを述べており、それが「外的差異」と言うべきものの一つの実質を示唆しているように思われる。

ドゥルーズは、ベルクソン哲学において内的差異を重要視しているが、反対に、メルロ＝ポンティは自然との隔たりを重要視していることがうかがえる箇所が、コレージュ・ド・フランスで行われた彼の講義のノートのなかに存在する。

実際、最初にそう思われたのとは違って、ベルクソンの哲学は、合致の哲学ではな

い。つまりこうだ、知覚するとは、物のなかに入ることである、しかし物のなかに入るとは、〈自然〉になることである、ところがもしわれわれが〈自然〉であるとしたら、われわれは物について何を「識別する」こともできまい[14]。

上記の引用では、メルロ＝ポンティは、ベルクソンにおける直観が、合致の直観ではないことを主張している。ベルクソン自身は、著作のなかで、直観することは対象のなかに入ることであると述べている。たとえば、『思想と動くもの』の「形而上学入門」のなかでは、「私がここで直観と呼ぶのは、対象の内部に身を移すための共感［*sympatie*］のことで、それによってわれわれはその物の独特な、したがって表現できない［inexprimable］ところと合致するのである」（PM 181）（強調はベルクソンによる）と述べている[15]。たしかにベルクソン自身が直観を共感だと語っているとしても、最初は対象と距離を取っていなければ、知覚することはできない。知覚において、〈自然〉から距離を取ること、隔たっていることの重要性をメルロ＝ポンティは指摘しているものと思われる。〈自然〉との完全な合致ではなく、「部分的合致」が重要なのである。そもそも〈自然〉のなかに飲み込まれたままであったとしたら、〈自然〉という全体からいかにして主体が現れてくるというのだろうか。注意しなければならないのは、ここでの〈自然〉との隔たりは、超越論的自我が世界との間に保つようなたんなる認識主体と対象との間の隔たりではなく、認識においてつねに前提されている実在における隔たりである、ということである。また、『道徳と宗教の二源泉』でベルクソンが示しているように、われわれ人間の社会は、もともと自然から、自然の要請によって生まれたものであったが、われわれ人間はだんだんと自然の要請に背き、自然が当初計画していた社会ではない性格を帯びた社会をつくろうと試み始めた。そうした試みにおいては、内的差異よりも外的差異が重要になってくるだろう。

ベルクソンが述べている、直観することとは対象のなかに入ることである、ということは、つまりある意味では、最初は知覚（直観）しようとする対象とは隔たりがある、ということでもある。もともと対象とぴったり寄り添い対象のなかに入っていたのであれば、わざわざ対象の内部に身を移す必要もないのであり、したがってそうした意味で直観することはできない[16]。

ところで、前三稿で確認したように、直観の否定的働きには言語の「暗示す

る」という働きが関わっていたのだったが、それも含めて考えると、メルロ＝ポンティからさらにヒントを得られる部分がある。具体的には、われわれがベルクソンに確認した直観と「暗示すること」との関わりに関して、メルロ＝ポンティは先に引用したコレージュ・ド・フランスの講義のノートだけでなく、「哲学をたたえて」[17] のなかでも、近いことを述べている。

> 直観とは、もはや哲学者と〈物のなかの意識〉との融合［fusion］ではなく、哲学者と〈諸現象〉との一致や相属関係の意識であると言いうるような契機がそこにはあるわけなのです。だが、そのとき、大事なのは生命を説明する［expliquer］ことではなく、ベルクソンもそれに近いことを言っておりますように、ちょうど画家が表情を解読するような具合に、生命を解読する［déchiffrer］ことです。「生命の意図、つまりさまざまの系統のなかを貫き、それらを相互に結び合わせ、それらに一つの意味を与える〈単純な運動〉」[18] を探し当てなくてはなりません。が、そうした解読は、われわれが、自分の受肉せる存在のうちに生命のアルファベットや文法を携えているという意味では、われわれのなしうるものですけれども、しかしだからといって、〈完結した意味〉をわれわれのうちに仮定したり、生命のうちに仮定したりすることはできません[19]。

メルロ＝ポンティは、直観は融合ではないということを述べている。われわれ（主体）と隔たりのある、生命を直観によって「解読する」ことは、対象と完全に合致するような直観とは区別されなければならない。

おそらく、われわれには生命を説明しつくすことはできないであろう。そうではなくて、暗示と表現という対になる構造を用いるとすれば、生命が暗示していることをわれわれは解読すればいいのである。この場合、なるほど、ベルクソンにおけるように、われわれが言語を用いて他者に直観（や直観によって把握された実在）を暗示する、というのではなく、生命が暗示するものをわれわれが直観して解読する、という関係になっており、関係は同一ではない（むしろ逆である）が、けれども、対象を言葉で示そうとするときの対象との距離の取り方については、両者に共通のものがあると言えるのではないか。直観によって生命を解読する場合、やはり解読するからには対象と隔たっていなければならないわけであり、そこでそうした直観の哲学は「（絶対的な）合致の哲学」ではありえない[20]。生命の流れのなかに取り込まれていながらも、解読し

ようと試みる対象である生命と隔たりを持ち、〈完成した意味〉を仮定するのではなく、生命によって暗示されている意味を解読していく、という行為にこそ意味がある。意味があるというよりも、意味をきちんと実在に沿って生成させるとも言いうるだろう。ベルクソンが避ける「すでに出来上がった概念」による説明を、メルロ＝ポンティも正確に把握し、「〈完結した意味〉をわれわれのうちに仮定」することを拒み、「〈単純な運動〉」を探し当てることをめざしている[21]。

本節では、ドゥルーズが、内的差異のうちにすべてを解消しようとし、それによって否定や他者性の重要性が失われてしまっているのではないだろうか、という疑問を解決すべく、「隔たり」や「部分的合致」を重視するメルロ＝ポンティの哲学を取り上げた。すると、内的差異に解消されてしまいかねない否定や他者性を救い出すものとして、メルロ＝ポンティの哲学及びベルクソン解釈は、有用に思われた。しかし実は、メルロ＝ポンティも〈存在〉［Être］の差異化という、全体の差異化にいきついてしまう。それでは、われわれが否定や他者性を考察する際に手がかりにするものとしては、メルロ＝ポンティの哲学でも不十分なのである。「(1)」から否定について考察し、「(3)」までで否定と他者性が現れてきたのであるが、それをすべて差異化のもとに帰してしまっては、意味がないのである。では、われわれはどうすべきか。内的差異に還元されえないものを考えよう。次の第４節では、内的差異ではなく、外的差異と他者性の関係について明らかにしよう。内的差異と外的差異との差異を明らかにし、そして外的差異がいかにして他者性と関係しうるのかを論じ、そこにまた否定との関係を持ち込まねばならないだろう。

４．外的差異と他者性

先ほどから、内的差異よりも外的差異のほうが実は重要な役割を担っているのではないだろうか、と問いを投げかけてきたが、内的差異と外的差異との差異は一体何なのであろうか。その点をまず明らかにしなければ、外的差異の重要性を証明できないだろう。外的差異の重要性が明らかになれば、内的差異を重要視するドゥルーズの主張の不十分な点もわかり、ベルクソン哲学における

否定と暗示される他者性が確立されるであろう。

内的差異においては、差異化したもの同士が経験においてあるいは時間においてつながっており、外的差異のようにきっぱりと切り離すことができない。内的差異においては、片方を消してしまっては、もう片方に変化が生じる。われわれの経験を考えてみれば分かることであるが、持続しているわれわれの経験の一部を切り取ろうとしてしまうと、それはほかの部分にもなんらかの影響を及ぼす。記憶を取ってみても分かることであるが、ある記憶を消そうとしてみると、ほかの記憶にも影響を及ぼすのである。

外的差異の場合を考えてみよう。外的差異の最も身近で最もわれわれの実感を伴って「差異」だと認識できるものは、おそらく「他者」の存在である。われわれは、他者と出会い、他者と対峙したとき、自分とは絶対に別個の存在であることを考えるまでもなく「知っている」。われわれは、目の前に現れる他者を自分の一部であると思うことはないだろうし、私も他者も自然の一部であって、その自然の差異化による内的差異なのである、とは思わないのである。また、外的差異としての他者をわれわれが感じるとき、「私」の視点を起点としている。内的差異においては、すべてが差異化していくため、他者の存在も「私」からの視点も必要ではないが、外的差異においては、絶対に他者の存在と「私」の視点を必要とするのである。持続という全体のなかでの内的差異においては埋もれてしまう「他者性」は、外的差異においては絶対のものである。

私（主体）とそれを取り込む全体との隔たりを確立したうえで、さらに私とは絶対的に別であるものとしての他者の存在に気付かないわけにはいかないのである。自然という全体を出発点として考えはじめると、私と自然との差異は、ともすれば内的差異に包括されてしまう。私も他者も自然の一部として考えられてしまうのである。しかし、他者性を基底とする外的差異は、内的差異に還元されつくされない特質を持つのではないだろうか。それぞれの「私」が自然と隔たりをもち、そして自然から分かれてきた「私」と、また同じようにして分かれてきた別の「私」が出会うとき、そこには絶対的な外的差異が生じるのである。

「(1)」において、「ベルクソンの批判は二重になっていて、否定的なものの二つの形態のなかには、質的な差異［*différences de nature*］に対する同じ無視が

あることを非難する」というドゥルーズの主張を確認した[22]。われわれは内的差異ではなく外的差異が重要である、ということから他者性を導こうとしているわけであるが、この「質的な差異」に関しても詳しく見ていく必要があるだろう。

実は、われわれがポジティヴな価値を与えようとしている外的差異は、質的な差異・本性の差異［différences de nature］ではない。かといって、量的差異・程度の差異［differances de degré］でもないのである。では、他者性を基底とする外的差異とは何か。「数的差異」と言いうるものである。数的差異とは、量や質の差異が問題になっているのではなく、私と他者とは、同じ人間であるという意味で類似し、生命の大きな流れのなかにいるという意味ではそこに飲み込まれてしまうかもしれないが、少なくとも現実に一人一人、一個一個、という意味において完全に「別個」である、という意味での差異である。

現実の空間において別個である私と他者、という意味での差異は、批判されるべきものなのだろうか。ベルクソンが批判したのは、空間的でないものを空間的表象に翻訳してしまうことであった。そこから生じるさまざまな錯覚や誤謬の根を断ちたかったのである。しかし、われわれが問題にしている外的差異は、現実に別個である数的差異なのであり、われわれの知性がその行動のために勝手に翻訳した空間的表象なのではない。外的差異は空間的であることにおいては批判の目が向けられそうではあるが、実は、現実に即しているような外的差異は、批判されるべきではないのである。ベルクソンが求めたものは、形式的な差異ではなく、実質的な差異である。その意味において、「外的差異」と一口に言われるものにも、その内実は二種類あり、形式的に外的な差異として設定したものと、実在に沿って外的な差異としてそのようになっているものがある、と言いうるだろう。後者が、他者の存在としての外的差異なのだ。

実は、まさに潜在的な内的差異の意味を強調するドゥルーズ自身が、「〈全体〉は潜在的［virtuel］なものでしかなく、現勢態［l'acte］に移行することで分割され、この〈全体〉は、互いに外的なものにとどまるその現勢的諸部分［ses parties actuelles qui restent extérieures les unes aux autres］を集めることができない」[23] ということを述べている。「還元不可能な多元論（複数性）［un pluralisme irréductible］」[24] つまり、空間的である数的差異が現勢的（現実的）世

界には消えることなく存在し、そのような複数性・数的差異としての他者が、現実には現れているのである、といえるだろう。

上記のような事情を考慮すると、やはり現実的で実在に即した差異である外的差異、そのような外的差異として現に現れている他者というものを無視できない。ドゥルーズも言うように「還元不可能な」ものとして現実に現れており、内的差異に還元することは不可能なのである。

現実に現れている他者に対応していないという点で、内的差異も、ベルクソンが批判する空虚な概念、閉ざされたシステムのなかで自己充足している概念になってしまいかねない。ベルクソンが創造しようとしたものは、そのような概念ではなかったはずである。ドゥルーズがいう「内的差異」も、空虚なもの、実在を捉えそこねているもの、概念の不適切な拡張となってしまいかねないだろう。

では、上記のような、他者性を基底とする外的差異は、ベルクソン哲学においてどのような役目を果たしているのだろうか。ドゥルーズはベルクソンの哲学において否定ではなく内的差異を重要視しており、「否定なき差異の概念」に達することこそがベルクソンの最大の努力であったと主張している。しかし、「外的差異」あるいは「他者との関係」が重要だとすれば、やはり、社会的・教育的な性格を持ち、人（誰か）をめざす否定の力が重要になってくるのではないだろうか。

ここで再度、前三稿での考察を振り返って見ると、「(1)」から考察してきた否定の力との関係が鍵となってくるのである。「(1)」で明らかになったように、否定は何か事物をめざすのではなくて、誰か人をめざしているものであり、そこには否定のもつ社会的（あるいは教育的）な性格が存在する。そうした否定の性格に対して、ベルクソンは「社会のはじまり」（EC 288）を見ており、人と人との対話を基とする社会性が顔を覗かせている。しばしば、ベルクソンの哲学には他者性がないと言われるが、そうではないということが、否定の持つ社会的な性格から明らかになるだろう。

また、現に社会のなかで働いている否定的な力としての抗議は、やはり社会を、そして他者をめざしているものであり、実践的なものであり、単に何かをめざしているわけではない。

すべてが内的差異として解消されてしまうかもしれない社会での個々のひとびとを、「私」という観点から見たとき、そこでは「『私』ではないもの」、「『私』とは別個のもの」に出会うのであり、それが実際の他者であれ、可能的な他者であれ、そこには他者性が存在する。そこには絶対に埋めることのできない「隔たり」があり、別個である他者と私との存在が浮き彫りになる。

現に働いている否定的な力として反自然を考えてみても、単に私と自然との関係が問題なのではなく、私と社会との関係、私の対他関係が問題なのである。

ここで、ベルクソンは、彼の哲学において他者性を基底とする外的差異、否定を重要視しているとは述べていない、という反論があるかもしれない。たしかに彼は、文字通りそのようなことは述べていないだろう。しかし、ベルクソン自身が書いているように、哲学における言語の役割を考えてみると、哲学においては文字通り「表現する」のではなく「暗示する」ことが重要なのである。ベルクソンが「表現したかった」のではなく、「暗示したかった」ものは何であるのか。われわれは考えてみなければならないだろう。

ベルクソンは、議論の中身が混同していることから生じる誤った問題を、その原因を明確に整理し、混同を解きほぐし、それらをほぐしてやることによって、本来の姿になることを望んだ。その誤った問題をときほぐす議論のなかで暗示されるもの、いわば否定神学的とも評されうる記述のなかで浮き彫りになってくるものがあるのではないか。それが、他者の存在であって、暗示する言語に託された使命なのである。

結論

前三稿からのわれわれの一貫した目的は、ベルクソン哲学における「否定」の諸問題を明らかにすることであった。ベルクソンの哲学は、そのポジティヴな面、つまり「直観」によって実在を肯定的な仕方でつかむことにおいて評価されている。実在を直につかむことを重視するベルクソン哲学においては、否定的なものよりも肯定的な「直観」等がキーワードとなるのである。ベルクソン哲学の肯定的な面については、さまざまな研究がなされ、ドゥルーズの『ベルクソンの哲学』が代表するように、否定性を排除し肯定性によって行われる

哲学こそがベルクソンの哲学だという見解が主流となっている。また、ベルクソン哲学における「否定」や「無」に関する断片的な研究は存在するものの、「否定」に関する俯瞰的な研究は少ない。

「否定」がどのような点において批判の対象となるのかを明らかにしなければ、ベルクソン哲学は肯定的なものであると言うことはできないだろう。

われわれは、ベルクソンの「否定」を考察するうちに、ベルクソン哲学において欠けていると言われるもう一つのものに到達した。それが「他者」の問題、他者性である。また、否定の問題を考えていくと、どうしても彼の言語批判の問題にも突き当たる。ベルクソンの、言語に対する批判的な態度もよく知られたものであるが、彼にとって言語はどのような点で批判対象となりうるのか。

つまり、従来の一般的なベルクソン哲学では、肯定的な面が注目され、他者の問題の欠如と、言語に対する批判とがよく知られたものである。ベルクソン哲学における否定の問題、他者の問題、言語批判の問題の三つを、ポジティヴなベルクソン解釈の陰からわれわれの目の届くところへ連れ出すことによって、ベルクソン哲学の新たな側面が見えるようになるだろう。これがわれわれの目論見であった。

本稿では、まず前三稿までに否定を考察するなかで現れた他者について整理し、そこからドゥルーズのベルクソン解釈に入っていった。ドゥルーズのベルクソン解釈では、ベルクソンの哲学は否定的なものを排除しようとした点において評価されており、否定や他者の問題はすべて「内的差異」のなかに解消されてしまう。ベルクソン哲学において、実は否定的なものが重要な働きをしていることを示すために、われわれはこの「内的差異」について批判的に考察しなければならなかった。内的差異が取り逃がしてしまうものが、実はベルクソン哲学において重要な力を持っているのである。

ドゥルーズが内的差異を重視するのに対し、メルロ＝ポンティは「隔たり」を重視する。しかし、最終的にはただ一つの存在の差異化という見方に傾くメルロ＝ポンティの哲学は、われわれの観点では不十分なところを残し、われわれとしては最終的に、内的差異とは区別された「外的差異」の重要性を主張するに至った。

否定の問題に関する考察から始め、そこには他者の存在が暗示されているこ

とに気づき、またベルクソンが批判した言語は、表現する言語であったことが明らかになる。否定に関して、実践的な面においては評価されていること、他者が暗示されていること、暗示する言語については評価されていること、これらは、一般的なベルクソン解釈とはまったく違った表情をわれわれに見せてくれる。ベルクソンが否定を否定的に扱ったのは、それが実在をとらえていないという点においてであり、言語を批判したのは、それもまた実在に即していないという点においてなのであった。彼は、いつでも現実のものを、誤った翻訳をなしに掴もうと努力する。直に掴もうという努力を伴うものは評価され、そうでないものは哲学において棄却されるべきなのである。

他者の問題はどうだろう。われわれは、現実に生き、そしてその現実のなかで他者と出会う。われわれが向かい合う他者の存在は、決して空虚なものではなく、実在である。ベルクソン哲学の、目立った、ポジティヴな面だけに目を向けていては決して見えることのない他者が、否定的なものにおいては暗示されているのである。ベルクソン哲学のポジティヴな面だけを見て、それに惑わされることなく、われわれはベルクソン哲学が暗示しようとした現実を受け取らねばならない。ヴァレリーが述べているように、ベルクソンが彼の意識のなかで行ったものを、他者の意識のなかで再構成したいという欲求によって、イマージュによる暗示する言語に至ったのだとすれば、ベルクソンにとっての他者であるわれわれ読者も、そのベルクソンの努力に応じねばならないだろう。そのためには、ベルクソン哲学のポジティヴな面に隠れている、暗示されているネガティヴな面にも目を凝らし、錯覚から目を覚まさなければならない。

われわれが本稿までの一連の考察においてめざしていたのは、こうした新しいベルクソン解釈であった。そこには、従来評価されている「直観」をはじめとするポジティヴな面だけではなく、見落としてしまうような否定の諸能力、他者の存在、そしてそれを可能にする暗示する言語が現れてくるのである。

しかしなるほど、ベルクソンの哲学には、「私」や「他者」がないと言われる。他者へ向かう力や、社会を結び付ける力すなわち個々人を社会という枠へと結びつける力についてのベルクソンの考察はあるものの、「他者」あるいは「他者性」それ自体に関する議論はほとんど見られないといってもいい。

この現象をわれわれはどう理解すればよいのだろうか。それは、ベルクソン

が他者に対する鋭く繊細な感性を持っていたからなのかもしれない。単純なもの、直接的なもの、意識に直接与えられるもの、持続、生命、など、ベルクソンが直観によって捉えようとしたものは、さまざまな言葉で言い表すことができるだろう。なぜこれらの直接的な把握に、彼はこだわったのか。それはもちろん、それらが重要なものであって、哲学的な誤って立てられた問いを正し、正しく問いを立てること、明確に答えられるべく問いを創造することが彼の哲学的方法のひとつであったからであろう。肯定と否定との考察を振り返ってみると、肯定は直接事物に向かうのに対し、否定は直接事物へ向かうのではなく、他者を前提としていることが明らかになった。直接的なものの把握にとっては、肯定を媒介として成立する否定は、純粋なものではないといえるだろう。だが、直接的なものが何でないかを表すときに否定神学的記述として現れてくる他者性というものがないだろうか。

既存のベルクソン解釈を参考にしながらも、常にそこにも批判の目を向け、ベルクソンの哲学そのものから感じ取った直観的なものを尊重しよう。われわれは、硬直した既存の哲学を鵜呑みにするのではなく、ベルクソンが他者のなかへ向けて暗示しようとした哲学を自分自身で体験しなければならない。それは、錯覚に陥る可能性について常に注意深く観察し、ときには否定的なものによって、障害や誤謬を取り除きながら、われわれの目の前に広がる現実に、目の前にいる他者に、われわれの意識に、直接向かうことが大事なのだ。そうすることで、われわれはベルクソン哲学の、生き生きとしたところをそこなわずに済むだろう。自分で哲学すること、自分で哲学し直すこと、そうした体験こそが、哲学における喜びなのではないだろうか。

註

（1）　本稿は、筆者の修士学位論文「ベルクソンと否定の問題――暗示する言語と他者――」（2015年３月、成城大学大学院文学研究科にて学位取得）の「第４章」と「結論」に若干の加筆・修正を施し、一論文として体裁を整えたものである。

なお、ベルクソンの主要著作及び書簡集からの引用は、以下の略号とページ数とを以て出典を示す。また、主に参照した邦訳を［ ］内に記す。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2013 (1889). ［アンリ・ベルクソン、中村文郎訳『時間と自由』岩波書店、2001年］

MM : *Matière et mémoire*, PUF, 2010 (1896). ［アンリ・ベルクソン、合田正人・松本力訳『物質と記憶』筑摩書房、2007年］

EC : *L'évolution créatrice*, PUF, 2009 (1907). ［アンリ・ベルクソン、合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年］

ES : *L'énergie spirituelle* PUF, 2009 (1919). ［アンリ・ベルクソン、原章二訳『精神のエネルギー』平凡社、2012年］

DS : *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF, 2012 (1932). ［アンリ・ベルクソン、森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉Ⅰ』『道徳と宗教の二つの源泉Ⅱ』中央公論新社、2003年］

PM : *La pensée et le mouvant*, PUF, 2013 (1934). ［アンリ・ベルクソン、原章二訳『思想と動き』平凡社、2013年。河野与一訳『思想と動くもの』岩波書店、1998年］

C : *Correspondances*, PUF, 2002.

（2） 以前の議論については下記の3論文を参照。

高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題（1)――否定の否定」『AZUR　第19号』成城大学フランス語フランス文化研究会、2018年、87-105頁。

高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題（2)――否定と直観」『AZUR　第20号』同前、2019年、95-118頁。

高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題（3)――反自然と抗議」『AZUR　第21号』同前、2020年、95-107頁。

（3） つまり、われわれの考察の展開は、否定から他者へ、あるいは否定から暗示へ、という方向である。われわれの展開とは反対に、ベルクソン哲学における他者の問題、ベルクソン哲学における対他関係から、「暗示する」という行為へと考察が進められる研究が存在する。それが、エリック・ポミエの「ベルクソンにおける対他関係 」（Éric Pommier, «La relation à autrui chez Bergson», *Philonsorbonne*, 2010, pp.47-67.）という論文である。ポミエの展開は、こうだ。まず、ベルクソン哲学における対他関係について、ポミエはある疑問を提示している。他者の問題は、現象学的なアプローチにおいては重要な問題であるのに対し、ベルクソンは他者の問題に対して奇妙な無関心を保っている、というのである。たしかに、ベルクソンの著作を読んでみればわかることであるが、他者の問題を主題として扱ったものが見当たらない。社会における人と人との関係や、社会における力についての考察は存在するものの、対他関係そのものについての明確な記述がない。ベルクソンの対他関係への無関心について、ポミエは、それが他者の問題が無益なものであることの暗黙の認識であるのか、それとも他の要因があるのかを考える。そこで、ベルクソン

の自由の問題と内的自我との問題に突き当たる。ベルクソンによれば、自由な行為とは、他人とのコミュニケーションにおいて都合のよい表層的な自我ではなく、相互に浸透し合った内的自我との一致によるものなのである。内的自我との一致が自由な行為の本質だとすれば、表層的な自我を必要とする他者とのコミュニケーションは邪魔なものとなる。ポミエは「他人は、有用ではあるが表層的な、コミュニケーションを私に強いることによって、この自己自身の現前化に対立する者なのである」(p.47) という見解を述べている。すると、自己自身つまり内的な深い自我との一致がベルクソンにおける自由なのだとすれば、他者はそれを阻害するものであり、表層的ではないコミュニケーションというものは成立しないのであろうか。そこでポミエが提唱するのが、「暗示する」ことなのである。ベルクソンの『笑い』と、芸術や詩を手がかりに、暗示することによって成立するコミュニケーションを探ってゆく。たとえば、ポミエは「詩人が伝達するもの、それは、実在を掴み直すための努力の感情、つまり、イマージュが暗示する持続、記憶、意味である」(p.55) と述べ、イマージュが暗示するものに注目している。

ポミエの論文は、他者の問題、対他関係とを考察する上で、暗示が有効な手段として提示されるわけだが、これまでに述べたわれわれの考察の方向とは逆である。われわれが本稿において示そうとしているのは、ベルクソン哲学において否定的に扱われる否定の問題を扱ううちに、他者と暗示とに出会うという展開なのだ。しかし、方向が逆だとは言っても、否定と他者と暗示との関係はやはり切れないものなのであり、その点において、ポミエ論文を参照することは、本稿にとっても意味がある。

（4） Valéry, Paul, *Œuvres, Tome I*, Pléiade, Gallimard, 1957, p.885.

（5） Gilles Deleuze, *L'île déserte et autres textes*, Editions de Minuit, 2002, p.57.（ジル・ドゥルーズ、宇野邦一ほか訳、前田英樹監修『無人島 1953-1968』河出書房新社、2003年、77頁）

（6） *L'île déserte et autres textes*, p.59（邦訳83頁）

（7） Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, Gallimard,1953 et 1960, p.21.（メルロ＝ポンティ、木田元編、木田元・滝浦静雄共訳『メルロ＝ポンティ・コレクション２　哲学者とその影』、みすず書房、2001年、15頁）

（8） そして、邦訳の訳註は、ベルクソンの『思想と動くもの』の「哲学的直観」における、否定の直観的な能力について述べられている箇所を参照するように促している。ベルクソンが語る直観が、肯定的なものとして扱われるなか、「哲学的直観」における、否定の直観的な能力というものは、明らかに異彩を放っているのだ。

（9） Ibid., p.21.

（10） Ibid., p.25.

(11)　Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, p.161.

(12)　Ibid., p.162.

(13)　Cf. MM 247, 250, DS 233.

(14)　Maurice Merleau-Ponty, *La Nature. Notes. Cours du Collège de France*, p.80.

(15)　ここにおいても、直観と表現する［exprimer］言語との不一致がほのめかされている。

(16)　また、ポミエの論点でもあったが、意識においても、表層的な自我と深い自我との隔たりがあり、そこからわれわれは深い自我へと降りていくことで内的な直観も可能になる、ということも考えられる。

(17)　Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, Gallimard, 1953.

(18)　EC 178.

(19)　Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, p.30（邦訳27-28頁）

(20)　前々稿「(2)」の第２節で確認した通り、ベルクソン自身も、生命の領域においては知性の枠組みでは不十分であることを主張し、その不十分さを補うものとして、暗示する働きを伴う直観を挙げている。直観とは、知性以上に本能に根ざすもので、それは共感のことであると述べているが、共感するためにはまず他者性を前提としていなければならないだろう。もちろん、自分自身と内的に一致することも述べられているが、それを超えて、直観による他者との共感がめざされているのである。直観することにおいて、他者性は明示されていないが、『創造的進化』における直観と知性との関係を考慮すれば、知性は核でありつづけ、直観はその周りの霧であるが故に、やはり他者性は暗示されるものなのである。

(21)　ここで、メルロ＝ポンティが引用している「単純な運動」について、ベルクソンのテキストを確認してみよう。

> 生命の意図、つまり諸々の線を横切って走り、それらを結び付けそれらに意味を与える単純な運動は、われわれの眼から逃れ去るのである。芸術家が、ある種の共感によって、対象の内部に身を置き直し、直観の努力によって、空間が彼とモデルの間に置いた障害［barrière］を下げながら［en abaissant］、再び把握しようとしているのはこの意図なのである。(EC 178)

メルロ＝ポンティが引用した、ベルクソンのテキストを確認してみると、ここにおいても、芸術と哲学の関係について言及されていることがわかる。上記の引用における、芸術家の行為を観察してみよう。すると、ある種の共感によって対象（モデル）の内部に身を置き直すというのは、まさに直観の特徴であることが思い出されるだろう。そして、直観の努力によって芸術家とモデルとの間の空間的な障害を

下げるということは、われわれが「(2)」で分析した『道徳と宗教の二源泉』における、障害は存在しないと否定することによって障害全体を取り除いてしまう、あの「単純で簡単な否定」(DS 51) を思い起こさせるだろう。『道徳と宗教の二源泉』における単純な否定は、障害［obstacle］を無視して始めてしまう、という行動（行為）に関連するものであるのに対し、芸術家の努力は、彼と対象（モデル）とのあいだの空間的な障壁を下げて対象を把握する、どちらかと言えば認識に関連するものである。しかし、『道徳と宗教の二源泉』の否定の場合も、芸術家の直観の場合も、単純なものを直に捉えることが肝心なのであり、障害や障壁に対して分解や分析といった複雑な操作は交えずに、直観によってそれらを克服しようとする 点において共通しているといえるだろう。

「解読する」ことは、ベルクソンの用語ではなく、メルロ＝ポンティの言葉であることに注意しながら、直観と生命の意図と解読について分析してみるとどうなるだろうか。表現すること、説明することは、対象（生命）にこちら側から意味を与えて、それを記述していく方法である。しかし、解読することは、対象（生命）から与えられる（暗示されている）意味（意図）をこちら側が読み取ることであるのではないだろうか。要するに、どちらから意味を与えるかによって、説明することと解読することとの区別が生まれるのである。ここに複雑さと単純さを持ち込むとすれば、説明することは複雑に対象に意味を与えて記述していくことであるのに対して、解読することは、メルロ＝ポンティが言う生命のなかの「〈単純な運動〉」を探し当てることである。探し当てる行程は、簡単には事が運ばないかもしれないが、単純な運動を探し当てること自体は、複雑な構造を持ってはいないだろう。

先のベルクソンの引用においても、やはり芸術と哲学との共通性がほのめかされている。芸術と哲学との関係について、ベルクソンはなんと語っていたか。われわれが前々稿「(2)」において言語とイマージュを分析した際に明らかになったことでもあるが、暗示するものである芸術と、表現する科学とは対になって扱われていた。ベルクソン哲学において、芸術の言葉が重視されているのである。

(22)　Deleuze, *Le bergsonisme*, p.41.　前掲拙稿「(1)」、98頁。

(23)　*Le bergsonisme*, p.108（邦訳115頁）

(24)　Ibid., p.108.